

優秀賞（岩手県知事賞）

井戸について考える

盛岡市立飯岡中学校

三年 才川 瑞季
さいかわ みずき

私には、毎年、お盆になると家族四人で行く場所があります。その場所とは、父の実家のある葛巻町です。

葛巻町は、「クリーンエネルギーの町」とも呼ばれ、とても自然の豊かなところです。父の実家は、冬部地区にあり、葛巻町の中では、比較的温暖な地域です。以前は九百人ほどいた人口も今では、およそ三百人の小さな地区となりました。かやぶき屋根の上にトタンをかぶせてある昔ながらの家です。この地区には、そういう家がまだたくさんあります。

家の近所には、町のみんなの小さな湧き水井戸があります。井戸といたら深いものをイメージすると思いますがその井戸は浅いため、すいかやジュースを冷やしに行ったり、その隣にある魚のいけすで親戚の子

と魚釣りの真似事をしたりできます。その井戸水はすぐきれいでおいしい水です。その井戸は丸い井戸なので、地区の人たちは、「丸井戸」と呼んでいます。以前冬部地区には、町水道がなかったそうです。それに、自家井戸を持っている家も少なく、その丸井戸から皆が飲み水や生活のための水としていったそうです。その話を聞いて、たくさんの人が何十年も使い続けてきたのに、井戸水は枯れることがないのかと思いました。

地面に穴を掘り、その穴の中に地下水を貯めて、利用する施設を「井戸」と呼んでいます。水脈まで穴を掘ってしまえば、自然と水が湧いてきます。つまり、水がある限りは、半永久的に利用できるのです。「水脈まで穴を掘ると、自然と水が湧いてくる。」自然の力とは本当にすごいなと思います。同時に地域の人たちが、井戸の重要性をわかり、大事に使い、守ってきたのだと思います。

井戸があつたことによって昔の人々は、安全な水を飲んでいたということなのです。もしかしたら井戸は、

人々の生活を支えるためだけでなく、コミュニケーションの場としても役立っていたのではないかと思えます。

今、日本社会では、お年寄りの孤独死が問題になっています。私は、その原因の一つは、コミュニケーションの場が少ないということもあると思います。でも昔は、井戸に行けば人がいて、世間話や家族の話などすることができたのではないのでしょうか。そういう役割も井戸は果たしていたのでしょうか。

現代に生きる私たちは、水道があり、井戸というものを知らない人が多いような気がします。井戸という昔の人の知恵から様々なことを教えられました。今ある井戸をもっと大切にして、そして多くの人々に知ってもらいたいと思います。

二〇一一年三月十一日、東日本大震災がおき、たくさんの方が亡くなりました。そして私たちは、数日間でしたが、水と電気が止まった生活を経験しました。そのとき私は、水のありがたさを改めて感じました。

それから二年日本では、災害時の水源として、浅井戸が見直されているということを聞きました。災害用としてですが、井戸が復活してきています。

人は、水がなければ、生きてはいけません。人は水と共に生活しています。私達は今、安全な水を飲むことができません。その原点は、「井戸」だと思います。井戸がなかったら私達は、今、安全な水は飲めていなかったかもしれません。そのことも分かって私たちが大切にしていかなければならないと思います。きれいな水を後生に伝えるためにみんな水を守っていききたいです。

*原文のまま浄書しています（以下同様）

優秀賞（岩手県知事賞）

最優秀賞（国土交通大臣賞）

命の源

滝沢村立姥屋敷中学校

二年 鈴木綾すずき あや

私が住んでいるのは滝沢村の姥屋敷地区という所です。酪農を営んでいる家も多く、私の家もその中の一つです。自然に囲まれていて、目の前にある雄大な岩手山がいつも私達を見守ってくれています。

私の家の水は井戸水です。自然の恵みを受け、透き通り、いつもおいしく飲んでいきます。水量が豊富で、水が枯れてしまふとか、水が少なくて使えないという心配をそれまでしたことはありませんでした。

そんな私達を襲った、忘れもしない三月十一日の東日本大震災。停電が起こり、全てのライフラインが止まってしまいました。私の家は酪農をしており、牛も六十頭余りいます。私達人間にとっても水は大切です

が、動物にとっても同じで、我が家では、その六十頭の牛に飲ませる水の心配もしなければならなくなりました。牛は一日に約百ℓもの水を飲むと言われていました。その水が全く出なくなってしまったのです。このような非常事態のために発電機を準備している家もありますが、私の家にはありませんでした。牛は水を飲まないと牛乳が少ししか出てきません。また、私の家では搾乳した牛乳を近くの会社におろしているのですが、どうしても毎日、定期的に搾乳しなければなりません。事態は深刻でした。

停電直後、父がまず行った事は牛のえさの確保でした。この緊急事態で品切れも予想されたからです。父と私はすぐさま車に乗り、大渋滞の中をえさの会社に向いました。そしてなんとか確保することができました。

次に搾乳です。乳しぼりをしないと乳房に炎症が起きてしまいます。停電で搾乳機も止まってしまったので、父と祖父母は余震が続く真つ暗な牛舎の中で乳し

ぼりをしたそうです。一晚中バケツト（ミルクを一時的にためるタンク）を使い、乳しぼりをしたと言っていました。真っ暗な牛舎の中で六十頭分の搾乳をし、家に帰ってきた父はととても疲れた顔をしていました。そんな父に、母はコップ一杯の水を差し出しました。その水を、一気にゴクゴクと飲みほした父は「生き返った。」と言いました。一杯の水の威力です。

翌日は泊まっていたいとこ達と一緒に、牛の水やりのために奮闘しました。人間の水は市販の水でまかなうことができたが、ただでさえ水不足が問題になっていた時です。六十頭もの牛にペットボトルの水を与えるのは無理です。幸い私の家には、牛用に井戸水から自然落下で流れてきた水を貯める所がありました。そこから手作業で牛舎に運ぶことにしました。五百ℓのタンクに水をいれると人の力では持ち上げきれない程の重さでした。大人達は軽トラックに積んでは牛舎に運ぶという作業を繰り返し、私達子どもは一杯ずつバケツに水をくんで運びました。三歳のいとも小さ

いバケツで何回も運んでくれました。

牛舎にバケツで水を運んだ時の牛の表情が忘れられません。大きな瞳で私をじっと見つめる目が水を待ちわびているようでした。バケツからウォーターカップに水を入れると、むさぼるように飲みほしてしまいました。この作業を何度か繰り返すと、牛もとても満足そうな顔をしてくるのでした。服はびしょぬれになり、とても疲れる作業でしたが、うれしそうな顔をしている牛を見て、私も幸せな気持ちになりました。

普段は当たり前のように電気や水を使っています。しかし今回の震災で、人間にも動物にも「水」は本当に大切なものだと感じるようになりました。水がないと人間も動物も生きることができません。まさに「命の源」です。疲れきった父を潤してくれた一杯の水。たったコップ一杯でも人間は立ち上がって次に向うことができますと知りました。これからは、水が使えるありがたさを心に留めて、限りある資源を大切に使いたいです。

優秀賞（岩手県知事賞）

大切な水

盛岡市立飯岡中学校

二年 本間 ほんま 朱莉 あかり

「節水しましょう。」「水を大切に！」このような言葉は、今やもう、あるキーワードのように使われている。そのせいか、毎日見るテレビでも放送され、町でときどき見かけるポスターにも描かれている。私も、毎日のように耳にし、目にしてるので、もう聞き流し、目に入っても、さほど気にとめなくなってしまうている。その証拠に、「ジャーッ」「ジャーッ」と今日も、蛇口を思いつ切り開く音が聞こえてくる。洗面所や台所。それだけでない、浴槽からも、公園の水飲み場からも：・あらゆる所から聞こえてくる。このままでいいのだろうか。

そんなある日、テレビで、「断水が続いています。」というニュースが流れていた。何気なく聞いていたが、

聞いているうちに「断水って何だろう。」と思い、調べてみた。「断水」とは、水道の給水が止まること。また、水道の給水を止めること、である。思い返してみれば、自分も二〇一一年三月十一日に断水にあっていた。あの時は、あんなに「水を大切に、少しずつ使わないと！極力、水を使わないようにしよう」と思って生活していたが、今やもう、「他の地域で起ってるんだ。別に、自分の地域じゃないし。」と他人事のように考えている。少し時間が過ぎてしまえば、こんなにも水に対しての意識が低くなってしまおうという恐ろしさを後日、私は知った。

その後、私の父がダム事務所に転勤したこともあって、私は、なんとなく水について考える機会が増えた。ある日、父との会話で、「ダムについて」という話題になった。正直言って、ダムへの興味はこれっぽっちもなかった私に父は懸命に話してくれた。盛岡市は、東は綱取ダム、西は御所ダム、北は四十四田ダムと、三方がダムに囲まれている地域なのだそう。さらに、

新しく築川に築川ダムができるので、市内に四つのダムが所在することになるらしい。ダムの役割は、台風や大雨により増水した川の水を一時貯めておいて、川の水があふれないように調節しながら安全に流す、渇水時にダムから流水を補給するといったはたらきである。これがないと、洪水や干ばつといった自然災害が起きるのだそう。こうして考えてみると、盛岡市は、とても守られている地域なんだと思う。それと同時に、盛岡市はダムがなければ、洪水や干ばつに見舞われたのかと思うと、恐怖の気持ちでいっぱいになった。

小学四年生の時、私は盛岡市の沢田浄水場へ見学しに行ったことがある。そこで、水は海が蒸発して雲になり、雲が集まって雨になり、雨がたくさん降って川として流れ、浄水場に川の水が運ばれ、消毒されてからやっと飲料水になるのだと教えていただいた。その時は何とも思わなかったが、今、思うと海や雲、川、もしかしたらダムを巡り巡って、やっとできた貴重な水なんだと思う。

私は始め、「水なんて」とか「水だったらどこにでもある。」と思い、水に対してまったく何も考えていなかった。しかし、父との会話や浄水場などへ行った経験を思い出すことによって、水の大切さ先人が私たちのために水を残そうと努力したということが分かった。この、先人達の教えを次の世代にも伝えるために、私たちは「節水しましょう。」「水を大切に！」といった言葉を、あるキーワードのように使うのではなく、実行する呼びかけのように使い、一人一人が水への意識を持つことによって、次の世代へも水を残すことができるのではないのだろうか。

佳作（岩手県知事賞）

命の水

盛岡市立飯岡中学校

三年 及川 おいかわ 夏華 なつか

「ろ過を重ねた安心・安全な磨かれた水を使っています。」

この表示を見た事がない人はいないだろう。これは、アサヒの炭酸飲料「三ツ矢サイダー」のラベルに必ず表示されている。私はこの表示に興味を持ち、アサヒ飲料のホームページを見ることにした。

すると、表示の通り、安全な水を消費者に提供するために、ろ過が行われていた。お茶や果汁飲料は、沈殿を防ぐために、ミネラルを含まない水を使用すると、このような、製造に必要な水の種類は異なるそうだと。ホームページに説明のあったろ過は、まず砂ろ過をし、次に活性炭ろ過、陽イオン交換、陰イオン交換、精密ろ過、マイクロフィルターの六つの段階を踏んで細か

い粒子まで取り除いている。このろ過は、安全でおいしい飲料を作る基礎であり、おいしさのために硬度が必要な商品にはミネラル調整をしている。私達は、このような製造会社の努力によって、おいしい飲料を飲んでいたので。

だが、いくらろ過するからと言って、私達が水を汚している訳ではない。飲料製造会社は、消費者にうれしいものを飲んでもらいたいと思い、多くの工程を積んでいる。また、私達が普段使っている水も、浄水場や下水処理場などで多くの工程を積んで全ての家に届けられている。その努力を裏切るように、水を汚すこと、水のある環境を壊してしまっているのだろうか。

私が小学生の頃、通学路の隣には、水が流れている所が多かった。通学路と田の間に、水を引く水路があったが、いたずらがあったり、ごみが捨てられたりしていた。私の通学路以外にもそういう場所はないだろうか。今まで、知らぬふりをしてきた所はないだろうか。

私は、小学生の頃、水路にごみが捨てられていたことを知らぬふりをして通り過ぎてしまった。だから、今、私にできることは、身近なことから少しずつ水をきれいにしていくことだと思う。歯磨きや手洗いの時は水を出しっぱなしにしないなど、家庭内から取り組めることは沢山ある。だが、日常生活で出来ることを実行しなければ、きっといつかは水が飲めなくなる。そんな生活を想像してみれば、今出来ることを確実に実行したほうがいいと誰もが思うだろう。身近に行えることを実行していくことが、水をきれいに保つことに繋がると思う。

また、サントリーのコマーシャルに必ず表示される「水と生きる」という言葉もある。「水の恵みを届ける企業として、貴重な水を守りたい」「文化・社会貢献活動を通じて社会と共生し、社会にとっての水になりたい」という願いが込められている。私達がいつも飲んでいる飲み物には、全てに願いや思いが込められて作られているのだ。

私は今回、調べてみて多くのことを知った。水は、私達の生活を支えるだけではない。商品として形を変え、私達の手に届けられている。これは、昔から水と共に生きてきた日本人の努力の結果だ。水を大切に生きてきた証が、今、目に見えるように生活を支えたり、商品として存在したりしているのだ。もし、その商品を作って下さる飲料会社に感謝の気持ちを伝えられることがあるとしたら、私達が水をきれいに守り続けることだろう。

私のように、商品を手に取って水について興味を持ち、「水を大切にしよう」と思うかもしれない。でも、必ずしも皆がそうであると限らないから、私から発信していきたい。

「全ての飲料のもとには水。その水を多くの努力によって加工されて沢山の飲料があります。だから、その努力を無駄にしないように、私達は身近なことで水をきれいに守りましょう。」

佳作（岩手県知事賞）

美しい水のある風景を残すために

盛岡市立飯岡中学校

三年 小野寺 おのでら こゆき

飯岡、羽場、それから私の住む湯沢地域には、田畑がたくさんある。したがって、用水路もたくさんあり、登下校の際も用水路がない所を通って行くルートはない。だから、学校のある日は用水路を必ず見る。

用水路には、たくさんのおい出がある。小さい頃、暑いからと用水路で遊んでびしょぬれになったことや、水が流れているから何か流してみたくなり、草を流しては自分が追いかける所まで追いかけたこともあった。それにあきたら、石や草で水の流れを塞いでみる。そして水の流れが悪くなると妙な満足感を覚え、しばらくその満足感に浸ってから、塞いでいた石や木を取る。こんな遊びを何回もやった。

田に水を引く所は四角くかこってあり、そのふたを

閉めると田に水が流れず農家の方に大変迷惑がかかる。小学校の頃、ふたを誰かが閉めたと農家の方から学校に連絡があり、全校生徒に何か知っていることはないかと先生たちが聴いていたことがあった。学校、学級でも注意されたが、結局誰がやったのかはわからなかった。すると、学校のあらゆる所に写真つきで「ふたを閉めるな」というポスターが貼られた。当時は何とも思わなかったが、そういう事は田畑がたくさんある地域ならではのだな、と感じる。今は自転車通学で、中学生ということもあり、用水路で遊んだりすることはなくなった。だから、たまに小学生が用水路の付近で遊んでいるのを見ると、とてもなつかしくなる。

小さい頃のことを思い出してみると、私が小さい頃の用水路と現在の用水路では、徐々に変化してきているのが分かる。小学生の頃は、ザリガニがいることもそれほど珍しいことではなかったけれど、現在小学生で、四年歳が離れている妹は、今はそのようなことはないと言っていた。また、用水路の周りにはたくさん

蛙がいたものだが、最近ではそのような光景も見られなくなった。これらのことから、多少なりとも水の質が落ちてきたのではないかと感じている。四年の間に、ザリガニや蛙が住める環境ではなくなったのではないだろうか。

その原因として、排気ガスなどが原因で起こる、環境汚染が関連していると私は考えている。目に見える形で汚染が進んでいる一方、水質低下など肉眼では見ることのできない所でも汚染が進んでいるのではないだろうか。

私達人間の住む世界はどんどん便利に、快適になっている。しかしその一方で、環境や水の汚染が住み、動植物達の住む世界は狭くなっていく。今はそれでもよいかもしれない。しかし将来、美しい水のある風景が失われる可能性がある。水は全ての生き物に必要な不可欠なものだ。そう考えるとするならば、人間は自分で自分の首を閉めていることになるのではないか。

これ以上の水や環境の汚染を抑えるために食器を洗

うときに使う洗剤の量を減らしたり、ゴミ拾いをするなど、身近なことからは始めてみてはどうだろうか。

しかし、このようなことを私一人でやっているだけでは大きな変化は期待できない。水からの恩恵を受けている私たち人間できょうりよくしてやるのが大切なのだ。

今私達がすべきことは、未来に水のある風景を残すことだ。今まで水は守られてきた。それを引き継いで、次の世代につないでいかなければならないと思う。小さなことでも皆でやれば、変化は期待できるはずだ。

未来に美しい水のある風景を残すため、一人一人何ができるか、これからさらに考え、実行するべきだと考える。

佳作（岩手県知事賞）

水を有効に使う

花巻市立東和中学校

三年 佐々木 薫

地球は水の惑星だ。しかし、地球にある水のうち九十七・五パーセントは海水で、淡水は残りの二・五パーセントしかない。そして淡水のうち七十パーセントは南極や北極の氷だから、動植物が生きていくために使える淡水はわずか〇・八パーセントだけである。

地球の水を一リットルと置き換えると、淡水はたったの一滴。この一滴は、地球上の全ての生き物と分け合わなければならない。私達が使える水が、とても限られた資源であることを実感できる。

今、世界では水をめぐる問題が多く起こっている。中国では都市が六百あるうちの約四百が水不足になっている。アメリカのカリフォルニア州では、二〇二〇年までに新しい水源を見つけないければ、この土地は完

全に干上がってしまうといわれている。他にも、国同士でこの川の水はどちらが使うかなどの問題もたくさんある。

そこで私は、残り九十七・五パーセントの海水も有効にできれば良いのと思った。調べてみると、驚いたことに海水淡水化は、もう沖縄や福岡でも利用されていることを知った。海水淡水化技術とは、海水から淡水をつくり出す技術のことだ。

海水を淡水化する方法は二つある。

一つは、「多段フラッシュ方式」だ。海水を蒸発させ、その蒸気を冷やして淡水をつくる。

もう一つは、「逆浸透方式」だ。水は通すが、塩分や微生物、ウイルスも通さないROろ過膜というフィルターを通して淡水をつくる。

少し前までは多段フラッシュ方式が主流で、中東アジアの砂ばく地帯に造られた。しかし多段フラッシュ方式では大量のエネルギーを必要とするため、最近ではろ過膜を使った逆浸透方式が世界の主流になっている

るそうだ。

また、逆浸透方式も最近では、圧力をかけて淡水を押し出す時に必要なエネルギーを、環境に負荷がかからないように自然エネルギーからつくり出す研究がされている。

では、水を有効に使うために家庭でできることは何だろう。それは、「水の汚れを減らす工夫」と「水のむだづかいをやめる工夫」だと思う。

水の汚れを減らすために、食器はまず紙で汚れや油を拭き取ってから水洗いすること。米のとぎ汁は植木や草に与えること。細かいごみは三角コーナーを通して流すこと。

水のむだづかいをやめるには、水をためて食器洗いや洗顔をすること。洗濯や掃除は風呂の残り湯を使うこと。また、トイレのタンクにれんがやビール瓶を入れると、一度に流れる水の量が減り、節水できる。

水は、昔から生き物と深い関わりを持ち、今なお欠かすことのできない重要な資源だ。

一方では、大津波や洪水など、水が災害を引き起こすこともある。また、平成六年の夏のように、大規模

な渇水となり、水道の給水制限や、農業被害が発生することももある。私達が有効に利用し、制御している水はほんのわずかにしか過ぎないことに改めて気付いた。

私達生き物は、水なしでは生きていけない。この命の水を、私達は地球を大きく巡っている水の中から、ほんの少しだけ貸してもらっていることを知った。

生き物と水が共に生き続けるために、海水淡水化技術を進歩させることは本当に重要で素晴らしいことだと思う。同時に、私達一人ひとりの日々の心がけも大切だと思う。まずは私から水の大切さを周りの人に伝え、考える輪を広げていきたい。そして、今すぐにも水を有効に使う努力を始めていきたい。

佳作（岩手県知事賞）

水の気持ち

滝沢村立姥屋敷中学校

二年 武田 たけだ 梨紗 りさ

水は、生きていると思う。水は、その地域によって味、色、匂いが大きく変化する。私は、四月に修学旅行で東京に行った時、何気なく飲んだ水に驚いた。

私は、修学旅行直前に体調を崩し、少しかぜ気味で修学旅行に参加することになった。のどがとても痛くて、こまめに水を飲むようにしていた。ほとんどが購入した天然水やジュースを飲んでいたのだが、一日目のホテルの中でついになくなり、私は初めて東京の水を口にするようになった。私は、口にした瞬間吐き出した。血の味がした。そのせいか、もともと体調が悪くなった気がした。

私の家の水は、井戸水だ。夏は、少しぬるく、冬は、キンキンに冷たい水になる。そんな時、私はじかに自

然を感じる事ができる。

私の祖母は、この我が家の井戸水の水しか飲まない。どこかに出かける時、友だちと温泉に行く時、買い物に行く時なども水筒に入れてかならず持ち歩く。確かに我が家の井戸水はおいしいと思うが、そこまで味にこだわらない私は、ある時祖母に聞いてみた。

「ばあちゃんどうして家の水しか飲まないの？せつかくもらった天然水も、食器洗いなんかに使って、もつたいないよ。」

「もつたいないのは、おまえのほうだよ。ばあちゃん病気には、薬がないのは、知っているね。岩手山のふもとにあるこの家の水が、一番の薬になるんだよ。この恵まれた環境のきれいな水があるのに、わざわざ天然水やらジュースやらを買って飲んでいては、水や自然、大地に失礼だからね。」

私は、びっくりした。確かに我が家の水はおいしいが、心のどこかで店で買った水の方が上等で、本物の水だと思っていたからである。祖母は、自分の家の水

に自信と誇りを持って、飲んでいたのであった。

そういえば、動物にも水の味がわかるのかなと思っ
たことがあった。あれは、東日本大震災の時だった。

私の家には、牛が十頭、羊が四頭、犬が一匹、ねこが
二匹、カナリアが一羽いる。私は、小さい頃からそれ
らの動物に水をやる係だった。停電になった時、水が
出ないので岩手山のふもとに水をくみに行った。そし
て、動物たちに水を飲ませた。三日後に電気も戻り、
犬に水をあげようと家の水をもってきたら、いつもな
らガブガブ飲むのに、まったく飲まなかった。十年間、
水係をやってきた私の勘から、岩手山の水がおいし
すぎて、家の水が飲めなくなったのではないのかと思っ
た。なんとか水を飲ませようと、バケツを顔に近づけ
たり、空腹になったところを見はからって目の前にお
いたり、いろいろ工夫を試みたが、まったく見向きも
しなかった。そんなに岩手山の水は、おいしいのかと
思い、私は我が家の水と飲み比べてみたが、私の舌で
はその違いが分からなかった。

水は、人間の表情みたいに、すぐ変わる。水はまる
で生き物のようだ。環境が悪ければ、汚なくて、おい
しくない水になる。

私はこれまで東京にあこがれていた。自分の地域は
何も無いと思っていた。確かにここは、シヨッピング
センターも地下鉄もデイズニールランドもない。でも、
大自然に恵まれた豊かで透んだ水がある。病気の祖母
を支えてくれる水、ちよつと足を伸ばせば岩手山の恵
を受けた豊かな水。人間の暮らしになくってはならない
水が私の住んでいる地域にはあった。すくすくと元氣
に生きている水を、毎日何不自由なく飲めることは、
何よりのぜいたくかもしれない。

修学旅行で行った東京へのあこがれはまだある。で
も、自分の生まれた土地への誇りも生まれた。今は、
私の地域には何も無いとは思わない。身近かにあり
すぎて、その素晴らしさに気付かなかった水という地域
の宝をこれからも大切にしていきたい。

佳作（岩手県知事賞）

おいしい水で生きる豊かさ

盛岡市立飯岡中学校

三年 田村 たむら 春菜 はるな

「あー、おいしい。」

いつも私が祖父母の家の水を飲んでいう言葉だ。祖父母は盛岡市の北にある岩手町のかなり山奥に住んでいて、専業農家を営んでいる。私が普段飲んでいる盛岡の水と比べ、同じ岩手県の水なのに岩手町の水はすごくおいしい事がとても不思議で、祖父母に水について尋ねた事があった。

岩手町は、山が町全体の面積の半分以上を占めている。そのため、冬にはたくさんの雪が降り、梅雨の時にはたくさん雨が降る。そして、雪解け水や雨水は山々にしみわたり、山そのものによってきれいな水へとろ過され、私たちの飲み水になるそう。祖父母の家の周辺は山からの湧き水を使って生活をしているの

である。私たちと同じように蛇口を通ってはいませんが、盛岡市は浄水場でろ過された水を使って生活しているのである。同じように蛇口を通ってもろ過の仕方が異なっているため、水のおいしさも異なっている。

祖父母は決して水を流しっぱなしにしたり、水を勢いよく流したり水を無駄にするようなことは絶対しない。水を勢いよく流さないで使ったり、私たちの手本となるような水の使い方をしている。祖父母は、水を大切に使うことこそが、おいしい水を恵んでくれる山への感謝だと言っていた。また、おいしい水を保つために月に一回程度、山の清掃活動を町内会で行っているとも言っていた。おいしい水だけでなく、おいしい水を与えてくれる山も大切にしているということだ。そんなこともあって、岩手町の湧き水は大自然と共に、町民が水と山を大切にしているからこそ、おいしさが保たれているのだろうと私は思った。

祖父母は便利な生活ではなく、山奥で不便な生活をなぜ送っているのか、私は聞いたことがあった。する

と、新鮮な空気を吸い、おいしい水を飲み、自然を感じながら生活することができると言い、便利な生活をしたいと思っていなかった。

山も人の手が入ることにより、生きることができ。人間も大きな恵みを与えてくれる自然があることによって生きることができる。人間と自然が、共生することが生きることの豊かさではないだろうか。

世界には水が足りなくて、また、水がなくて苦しんでいる人がいる。そのことは誰もが知っている事実である。しかし、水に恵まれている私達だからこそできることがたくさんあるのではないだろうか。水がないと人間は生きていくことができない。あたり前ではあるが、水と自然を大切にす、そして、大切にすだけだけでなく、私の祖父母のように清掃活動をする必要がある。これらを実行し、水を守り続けることこそが、これから大人になる私たちの大きな責任ではないだろうか。

そして、おいしい水を飲んで生きることこそ、豊か

な気持ちが一番、実感できることではないだろうか。

佳作（岩手県知事賞）

水でつながる世界

岩手県立一関第一高等学校附属中学校

三年 西丸とりまる 桜香おうか

「森は海の恋人」

水について考えたときに、ふと思い出したのが小学五年生の教科書に載っていたこの言葉でした。

毎年六月、岩手県一関市の山では、大漁旗をなびかせ、「森は海の恋人」を愛言葉に植樹をしています。しかも、植樹している人は皆漁師なのです。その時は森と海に何の関係があるのかよく分かりませんでした。しかし、授業で学習していくうちに次のようなことが分かりました。

「山に広葉樹の木を植えると葉が枯れて落葉ができる。その落葉が腐葉土となり、土に栄養分がしみこむ。しみこんだ栄養分が川に流れ、やがて海にたどり着く。それがプランクトンを育て、水産資源が大きく成長す

る。」全く関係のないものがここまで深く関わっているとは思ってもみませんでした。自然のつながりの素晴らしさ、水との深い関わりに改めて感動しました。

私たちの毎日は水に囲まれて生活しています。蛇口をひねれば消毒されたきれいな水がいつでも出てきます。きれいな水を飲むことができ、きれいな水のお風呂に入ることができ、きれいな水で洗濯ができるなど、これら全ては私たち日本人にとってはあたり前です。

しかし、世界を見ると、日本のような国はまれです。汚れた水でしか洗濯できない国もあります。地球上に住む人のうち約九億人（約十三パーセント）の人が消毒されたきれいな水が手に入らないそうです。また、五歳未満の子どもの約五人に一人が汚い水しか飲むことができず、命を落としているのです。もし、私がこの状況ならと思うと、自分がいかに恵まれた環境かよく分かりました。むしろ私たちは恵まれた環境がゆえに、水を大切にできない部分があると思います。例えば、水を出しっぱなしにしながらのシャワーの使用

用、洗剤を大量に使っての食器洗いなど、これら全ての行動が川などを汚し、海の生物の命をおびやかしているのです。

「水をキレイに」

それは口先だけなら誰でも言うことができるでしょう。この言葉はそんな軽く扱ってはいけないと思います。この言葉には植林をしている漁師の方々の思いや汚い水しか飲めない子どもたちの思いがたくさんつまっていると思います。植林をしている漁師の方はこう言います。

「水などの環境を守るといふ木を皆さんの心の中に植えたい。」

私はこの言葉を聞いて、自分自身何ができるだろうと改めて考えさせられました。

水を出しっぱなしにしない、お風呂の残り水を洗濯に使う、食器洗いの時は洗剤を一プッシュにする、よく考えれば自分ができることはたくさんありました。それを少しずつ実行して海産物が増えて、沿岸の復興

につながると思います。

自分の行動で少しでも漁師の方々や様々な国の人達が水と共に幸せになりますように。

佳作（岩手県知事賞）

今ある水の風景を

盛岡市立飯岡中学校

三年 藤原 美桜
ふじわら みお

以前、私の家の近くには小さな小川がありました。夏になると、蛍が小川に集まってきて、その辺りだけがボツと明るくて、幻想的な風景が広がっていました。その風景を見ること、その風景の中で遊ぶことが、私の夏の楽しみのひとつでした。小川には、ザリガニや小さな魚もいて、私は毎日のように小川で遊んでいました。じょうろで水をくみ、姉たちと水をかけ合い、キヤーキヤー騒いでいました。さらに、小川は私たち家族の生活の一部でした。小川の近くにビニールハウスを建て、小川の水で野菜を育てたり、車を洗ったり、私たちの日常に欠かせないものでした。だから、私はその小川が大好きでした。

しかし、私が小学四年生になったとき、小川の工事

が決定しました。小川をもっと有効に利用するためということでした。広い草地の近くにポツンとある小さな小川が、姿をかえてしまうと思うとショックでした。しかし、それよりも小川に集まってくる蛍はどうなってしまうのか、私はそのことがすごく心配でした。

それから、騒がしい毎日が始まりました。小川のほうから毎日のようにドリルのドツドツドツという機械音が聞こえてきます。「あの工事をするのであの小川に住んでいたザリガニや小さな魚たちはどうなってしまうのだろう」「こういう工事をするので、魚たちは住む場所を失ってしまう」「魚たちがいなくなってしまう」、心配で心配でたまりませんでした。

二カ月後、小川の工事が終了しました。あの小さな小川はなくなり、かわりに硬い鉄筋コンクリートに囲まれた、用水路に姿をかえてしまいました。

あの小さな魚たちやザリガニはいなくなりました。しかしその分、野菜を育てたり、田んぼに水が引きやすくなりました。あの小川が地域みんなの役に立った

ということですが。「よかったんだ」と思う反面、私はあのままの小川であってほしかったと思いました。

その年の夏、あの小川のあった場所に蛍は来ませんでした。「どうして？」とは思いませんでした。「やっぱり、工事が原因で来なかったんだ。」と思いました。童謡の「ほたるこい」には、

ほう ほう ほう ほたるこい

あっちのみずは ながいぞ

こっちのみずは あまいぞ

ほう ほう ほう ほたるこい

という歌詞があります。「あの小川の水はにがくなってしまったんだ。だから蛍たちはあまい川のほうに行っただんだ。」と思いました。それからもう、あの幻想的な風景をみることは出来なくなりました。

私はこのことを思い出すたび、自分の身近な風景を守っていききたいと思うようになりました。小さい頃から、自然の水が身近にあったことは、とても貴重なことだと思えます。毎日のように水にふれていたことで、

水の大切さを、体で感じる事ができたからです。

私たちは今、何不自由なく恵まれた生活ができています。それはあの小川から引いた水が、野菜や米を育ててくれているからかもしれません。でも、私の中に自然のまま残すことで、また新しい何かが生まれてくるかもしれないという思いもあります。自然のよさやありがたみを知ってさえいれば生活の中のほんの少しの不自由も「自然を残すから大切にしよう」という気持ちが生まれるはずです。また、何もかもが便利でなくても、そこから生きるための工夫が生まれたり、他のものへの優しさが生まれてくるはずです。

私たちができることは、一つ一つ小さいけれど、一つ一つの大切な思い出を忘れずに、今ある水のある風景を変わず後世に残していく努力をしていくことかもしれませんと思います。